

# ブラック・ブレット 【無限の剣製】

天然パーマ同盟

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二度にわたるガストレアとの大戦の末敗北した人類はガストレアが苦手とする磁場を

発生する鉱石“バラニウム”で作られたモノリスの壁の中に引きこもり抵抗を続けていた

そしてその大戦で起きた地獄を生き抜いた青年“衛宮四郎”は東京エリアの中で生活していた

そして四郎はある秘密を抱えながらガストレアと戦い続けていた  
かつて救ってもらった“正義の味方”に託されたものを貫く為

そしてたった一つの”かけがえない物”を守るため彼は剣を取る  
※四郎の読みは「シロウ」ですが f a t e の衛宮士郎とは別人です

# 目次

|    |                  |    |
|----|------------------|----|
|    | プロローグ            | 1  |
|    | 第一剣 「仮面の男との邂逅」   | 6  |
|    | 第二剣 「呪われた子どもたち」  | 19 |
|    | 第三剣 「それぞれの胸中」    | 36 |
|    | 第四剣 「悪からの誘い」     | 42 |
| 59 | 第五剣 「青空教室の子どもたち」 |    |

# プロローグ

世界は絶望に染まりきっていた

少年の目の前に広がる光景はそれを表すのにふさわしいだろう

空は暗雲に包まれ光が無く、街や家は瓦礫と化し崩壊しており、全てが炎に包まれていた

そして自分以外の人間はほとんどが死んでいた

崩壊した建物の下敷きになった者、炎に焼かれた者、体が欠損し失血死した者中には人の形の原型を留めていないモノもあり、鼻には炎で焦げ腐った臭いも

していたがこの炎のせいで既に嗅覚も麻痺していた

そんな地獄のような世界を少年はただひたすらに歩いていた

だがその歩みはおぼつかないものであり、よろよろとよろめいておりいつ倒れてもおかしくないものであった

体は五体満足で生きてはいるものの、体のところどころにはやけどや切り傷があり頭部も負傷していた

さらにこんな光景ばかりが広がり、頼れるものもおらず体力も精神も疲労している

少年ははふらつきながらもこの地獄から抜けるために歩き続けるしかなかった  
歩き続ける道の片隅にはまだ生きている者が少年に向けて手を伸ばし、うわ言の  
ように「助けて」と言う

何人もの人が少年に懇願するそれは呪詛のようにも感じるほどのものであった  
少年は向けられるその手を掴むことをせず、歩き続ける

なぜなら少年のその手には、既に掴んでいる手があるため他の手を掴む手はないから  
だ

少年の腕の中には、声を張り上げながら泣き続けている赤子が居た  
だがその赤子は少年の家族でも親族でも何でもない赤の他人である

少年も何故自分がこの赤子を抱いているのか分からないが、自分の前で泣き続ける  
赤子を放つておくことは出来なかったのだ

ゆえに、もう少年に他人に伸ばす手は残っていなかったのだ

差し延ばされる手から目をそらし、救いを求める声から逃げるように少年は歩き続け  
る

——何故このような地獄が出来たのか

この地獄が出来た元凶、それは世界に突如現れ驚異的なスピードで人類を侵略し始めた寄生生物『ガストレア』によるものである

ガストレアとは、ガストレアが内包する『ガストレアウイルス』によって遺伝子を書き換えられた生物の事だ

非常に高い生命力を持っており、通常の武器では効果が薄く脳か心臓を潰すか一撃で破壊するほどの威力でなければ倒すことは困難だった

さらに厄介なのがウイルスの感染力である

生物であればガストレアにガストレアウイルスを注入されるとその生物も新たなガストレアに変貌させられるのだ

どれだけ倒してもその数は減る事を知らなかった

また、ガストレアには成長したものに合わせ『レベル』がありその中でも最高ランクでありガストレア達のリーダーのようなものが存在した

それが『レベル5』の黄道十二星座の名を冠する十一体のガストレア達である『ゾディアック』と呼ばれる存在である

ゾディアックは現在の科学では倒す事が不可能だとされており、人類に対して猛威をふるった

そして人類はガストレアとの戦争に敗れたのだ

世界各地にも広がっているだろうこの地獄の中を少年と少年に抱かれた赤子は歩く果てしなく終わる事を知らない光景と無限ともいえる時間を歩き続けたことでいつ折れてもおかしくない少年に止めとされる出来事が起こる

少年の目の前にこの地獄の体現者であるガストレアが姿を現したのである

上半身はカマキリの姿で胴体より下は蜘蛛の胴体でそこにある円状の口からは粘ついた液体を垂れ流していた

少年は膝を地面につけ動こうとはしなかった

恐怖で動けない、ということではなく目の前の死の存在に生き残るといふ事を諦めたのである

既に少年の目には生気も光もなく、濁った眼で茫然とガストレアを見つめるだけであつた

ガストレアは少年に気付きその赤い眼光が少年を捕らえ、鎌を振り上げながら八本の脚を動かし少年に死を与えようとする

時を待たずにその命を刈り取る鎌を少年が受け入れた時



それは一瞬の出来事であった

どこからか飛んできた剣の雨がガストレアに降り注ぎ、脚を地面に縫い付け、  
体を貫き、胴体に突き刺さった剣が爆発したのだ

巻き起こる土煙に巻き込まれ目をつむる

煙が晴れ、ゆつくりと開けた目に写るのは先程自分を殺そうとしたガストレアと  
思われる肉塊の山と男の背中だった

その男は色素が抜けたような白髪に褐色の肌、黒い鎧のような服の上に紅い外套を  
羽織っており、両手には黒と白の色違いの双剣を持っていた

そして本能的に感じた

目の前にいる男が自分たち人間とは何かが違う、と

だが少年には、その何も言わぬ男の背中が頼もしく物語の中にしかないと思ってい  
た

正義の味方のように見えた

# 第一劍 「仮面の男との邂逅」

男は歩き続けていた

男が今歩いてるのは果てしなく広がる荒野だった

周りには劍が突き刺さっていた

だがそれは数十や数百ではなく数え切れないほどの数、まさに無限とも思えるほどのものだった

短劍、長劍、片手劍、刀劍、両手劍、大劍、細劍、双劍などそれぞれが別のもので固有のものだった

男はその奇妙で、どこか恐れと寂しさを感じる荒野をただ突き進んでいた

まるでそれしか知らないように

まるで、それ以外に道がないかのように

まるで…そうしなければならぬかのように

まだ朝日が昇り始めてすぐの時刻

朝である事を主張してくる目覚まし時計の音を切り、布団からその体を起こす  
起きてすぐに少し固まっている体をほぐし、ジャージに着替えて日課である早朝の  
走りこみ、腕立て伏せ、腹筋、スクワットなどの筋トレを行う

一通り帰宅するとシャワーで汗を洗い流し

とその上からエプロンをつける

冷蔵庫から昨日のうちに仕込んでおいた材料などを取り出し、調理に取りかかる  
大体の工程が終了し残りが後少しだと言うところで火を弱め温度を安定させて  
おいてから台所を離れる

「おーい朝だぞ、起きてるか？」

目的の部屋の前までたどり着き中にあるだろう部屋の主を呼びながら数回ノック  
をする、が反応はない

入るぞー、と断りを入れて部屋に入る

部屋の中はかわいらしく装飾されており本棚には漫画やDVDがありぬいぐるみが数個置かれているという女の子らしい部屋であった

そしてそのベッドには気持ちよさそうな顔をして眠っている少女

透き通るような銀髪に幼い顔立ちではあるが人形のように整った顔立ちで誰もが美少女と認めるものである

楽しい夢を見ているのだろうか、その少女は口元が綻んでおり無邪気な寝顔であった  
見ていて微笑ましい物でありあまりにも気持ちよさそうにしているためもう少しこのままでいさせてあげたいが、そんなわけにもいかないため少女の肩をゆすつて起こす  
「おーい、シロエ。もう朝だぞ、早く起きろ」

「うーん、あと五分」

「それ絶対五分経つても起きない決まり文句じゃないか。いいから起きろ、遅刻するぞ」  
うー、と言いなながら布団から這い出てよろよろと寝ぼけながら洗面所へと歩いていく  
自身の妹を見届け、台所へと戻り残っている調理を手早く済ませます

「お兄ちゃん、おはよう」

「ああ、おはようシロエ」

制服へと着替え未だに眠気が覚めないのか目を擦りながら挨拶する自身の妹に対し

挨拶を返す

「わー、今日もおいしそうなご飯！」

椅子に座り食卓へと並べられた料理を見て顔を輝かせる

食卓に並べられているのは和食で統一されており朝に適したさっぱりとしたものであった

少年少女食事中へ

「ごちそうさまでした！今日もお兄ちゃんのご飯はおいしかった〜」

「お粗末さまでした。これぐらい誰だって出来るさ。シロエも料理してみるか？」

俺が教えてやるぞ」

朝食を食べ終え満足といった様子のシロエに提案する

「え!? うくんどうしようかな、あ!でもそうすれば私がお兄ちゃんに朝ご飯用意

して、……………えへへ〜」

「シロエ?」

「!? え、えつと、い、今はいいかな! また今度教えてお兄ちゃん!」

「あ、ああ。分かった」

だらしなく顔を緩ませ想像するシロエに声をかけるとシロエはハッ!、となり慌てた

様子で断る

…四郎は口元から垂れていたよだれをふき取っている妹の姿には気付かなかつた

「行つてきまーす!」

「行つてらつしやい。車に気をつけろよー!」

はーい!と返事する妹を見送り自身も昨夜のうちにアイロンをかけておいたしわのない制服戸締りをして学校へと向かう

……これがこの世界の、衛宮四郎の日常の朝である

「一成、こつちの修理終わったぞ」

「む、そうか。すまんな衛宮、こんなことまで頼んでしまつて」

「別にいいさ、俺が好きでやってるんだからな。それよりほかはもうないのか？」

ついでにやっておくけど」

「それなら次は視聴覚室のビデオデッキを頼む。この度天寿を全うしてしまったようだな」

「全うしてたらもう直せないだろ」

時間は昼休み、四郎は近場の高校の冬木高校に通っており同じくその学校の生徒

であり生徒会長の柳洞一樹に頼まれ生徒会の仕事を手伝っていた

「そう言えば衛宮、アパートでガストレアが出たという噂はもう聞いたか？」

「いや聞いてないな。それでそのガストレアはどうなったんだ？」

「心配するな、既に民警が駆除したそうだ」

ビデオデッキを生徒会室で修理し終えお茶を入れている四郎に一成がそんな話をする

だがその話を聞いて顔を険しくする四郎を見て既に駆除された、と伝えると四郎はほっ、として席に着き自分の弁当を食べ始める

「それにしても物騒な世の中になってしまったものだな。いくらモノリスの中にといてもいつガストレアが現れるのかも分からないのだから」

「まあ、『モノリス』があつても絶対にガストレアが侵入してこないというわけでもないからな」

## 『モノリス』

それはガストレアが苦手とする磁場を発生させ、その異常な再生能力を阻害するという黒い金属で出来た巨大な壁の事だ

全長1618キロ、幅1キロの壁でこの東京エリアを一定の間隔で囲んでおりそのおかげでガストレアからの侵攻を防ぐ事が出来るのである

だがそれも完全というわけではない

逆に言えば磁場が届かないところから簡単に侵入できるということだ

例えば上手く気流に乗って超高度から侵入したり、地下深くから侵入する事がある

そしてもし侵入された時のもっとも恐ろしいのが『感染爆発』パンデミックである

感染爆発とはガストレアウイルスに対して抑制因子を持たない人類が血液感染で

継承崩壊というプロセスを経てガストレアに変貌しそのまま一気にガストレア化が

広がっていく事である

もしそうなってしまうえばこのエリアはすぐにでもガストレアに呑みこまれ、瞬く間に滅んでしまうだろう

「もうこの話はやめないか？ 起こるかどうか分からない事をいくら言ってもきりがないしそんな後ろ向きな事考えてたら暗い雰囲気になっちまうしさ」

「むう、確かにそれもそうだな。まだ半人前ではあるが俺も寺の住職だ。こんなことを



言っているにも出来ることと言えばお経を唱えることしかできんしな。∴所で衛宮、その唐揚げもらつてもよいだろうか？」

「ああ、構わないよ」

かたじけない、と一樹が拜んでからおいしそうに唐揚げをいただきそこから当たり前障りのない話をして

時間を過ごした

「やばい、ちよつと遅くなつたな。夕飯も大分遅れちまうな」

買い物袋を持ちながら四郎はすっかり日が落ち暗くなつた夜道を駆け抜ける

学校を終えた後帰りに買い物していると重そうな荷物を抱えた老人を見て放つて

おけず、荷物を代わりに持ち家まで送つたのだが、家とは真逆の方向であつたため

こんなに遅くになっているのである

シロエ心配してるかな、と考え家でお腹をすかして待つているであろう妹の為に休むことなく脚を走らせていたのである

そんな時近くの公園を通り過ぎようとしたとき、二つの人影が見えた

こんな暗がりであっても四郎の眼はその二人の影をはつきりと視認していた

一人は血のように紅い燕尾服にシルクハット、そして不気味に笑う仮面を被った男であり

もう一人は闇に溶け込むかのような黒いドレスに腰には二本の小刀、青い髪にその目は紅く染まっていた少女だった

どう見ても怪しき満点の姿である

だが少女の紅い眼を見て、『呪われた子どもたち』という事が分かるので二人は民警かと思つた

『呪われた子どもたち』とはガストレアウイルスを内包した子どもたちの事である

普通の人間がガストレアウイルスに感染すれば時間をおかずして感染者はガストレア化する

だが彼女たちは自らの体にガストレアウイルスを持つてゐる為、ウイルスの浸食に耐性を持ち一定のラインに達しない限り彼女らがガストレアと化す事はないのだ

そしてその呪われた子どもと人間がペアを組みガストレアと戦うのがプロモーターとイニシエーターであり民警と呼ばれる組織に属しているのだ

そしてその二人に自分の存在が気づかれていた

「そこに誰かいるのだろうか？ いったい誰かね？」

そう呼びかけられ、隠れても無駄だと思いついその二人の前に姿を現す

「俺は別に怪しい奴じゃない。気を悪くしたのなら謝る。あんた達は民警……」

「子比奈、殺しなさい」

「はい、パパ」

四郎が最後まで言い終える前に仮面の男が少女にそう言い放ち少女はそれに従い腰の小刀を抜き放ち四郎の首めがけて振るう

「なっ!？」

いきなりの攻撃に絶句する四郎であったが、迫る凶器を前に頭を後ろに倒し紙一重で回避し続けて振るわれたもう一刀の斬撃をそのまま後ろに転がることかわす

「…避けないで。上手く切れない」

「いや避けないと死んじまうだろ！ あんたどういうつもりだ！」

仮面の男に向かっていきなりの攻撃に対して怒りをぶつけるが仮面の男は意に介さ

ず愉快そうに言う

「ヒヒヒ、悪いね。目撃者がいると面倒なことになるのだよ。だから私達にあってしまった事に運が悪かったと思つて潔く死んでくれたまえ」

そう言つた仮面の男は銃剣の付いた悪趣味な二丁の拳銃を抜きこちらめがけて発砲してくる

「悪いがそんな簡単にはいそうですか、つて言えるほど物分かりがよくないんだよ！」

四郎は飛んでくる銃弾を横に跳ぶことで回避する

だがそこに小刀の少女が跳びかかり一撃、二撃と次々と攻撃してくる

四郎はそのすべてを見て避け続ける

そしてもう一度少女が小刀を振るつた直後を狙い反撃しよう、とした所で銃弾が飛んできたためすぐに回避し互いに距離が開く

「パパ、あいつ斬れなかった」

「そうだね。子比奈の攻撃をあれだけ避けるとは、ただの一般人ではないね」

「お前らは一体何者だ？何を企んでいる？」

四郎はこの二人を完全に敵とみなしその目的を問う

それを仮面の男はあっさりと答えるのだった

「ふむ、そうだね。私達は世界を滅ぼすものだ。目的は……まだ秘密だ。ヒヒヒ！」

それを聞いた四郎は男を睨んでいた目を一度伏せ、次にあげたときにはその目は敵意と決意があつた

「…そうか。なら、俺はアンタ達をここで

殺す」

そう言い放つた四郎を男は怒るでもあざ笑うでもなく、嬉しそうに笑つた

「ハハハハハハハ！そうか君もその類の人間だったか！面白い！ならば私達もそれに応えよう！」

そして両者が構えるなか四郎は小声で呟く

「<sup>トレース</sup>投影…」

四郎がその先の自分にとっての武器を出すための言葉を紡ごうとしたとき

近くでパトカーの音が鳴り響いた

おそらく近くにいた人が銃声を聞いて通報したのだろう

「…どうやら邪魔が入ってしまったようだね。帰るよ、子比奈」

「ええー！あいつ斬りたい！」

「我慢しなさい子比奈」

「むー。はーい、パパ」

少女は顔をむくれさせながらも男の言葉に従い小刀をおさめた

「それでは名も知らぬ少年よ、さようなら」

そのままその二人はこの場から去った

「待てーくっ！」

追いかけてようとするがパトカーが近くまで来ていた為、巻き込まれる前に四郎はその場から離れた

余談であるが、帰りが遅くなりしかも食材はさっきの戦鬪でぐちゃぐちゃになっており使い物にならなくなっていた為その夜は出前を取った

シロエは心配した、何してたの！ととても怒っており夕食も出前になってしまった為彼女のご機嫌をとるのに頑張る四郎であった

## 第二剣 「呪われた子どもたち」

あの仮面男と遭遇して次の日

俺とシロエはデパートに来ていた

帰りが遅くなり夕飯も出前になってしまった事でへそを曲げてしまったシロエの

ご機嫌をとるのに大分苦労したが、誠心誠意込めて謝り続けさらにシロエと交渉をし、何とか昨日の事は水に流してもらえた

そしてその交渉の条件であったシロエの欲しい物…天誅ガールズのグッズを買うことになったのだ

俺自身はよく知らないが何でも子どもから大人にかけてまで大人気のアニメらしい

…だが、何故魔法少女なのに赤穂浪士なんだ？

コーナーの前には赤を主張とした魔法少女が「死ねえええええ!!」と鬼の形相で斬りかかってくる絵が張られていた

いったい誰が考えたんだこんなもの。全くもってこれのよさが分からなかった  
「じゃあ俺はここで待ってるから、買うものが決まったら呼んでくれ」

「えー！お兄ちゃんも一緒にどれがいいか見てよ！」

「勘弁してくれシロエ、ただでさえ女の子ものグッズ売り場の近くで気まずいのに中に入ったら他の人にどんな目で見られるか分かったもんじやない」

もし中に入ろうものなら俺は不審なものを見るかのような視線を受け続けることになるだろう

いや、ひどければ俗にいう『大きなお友達』になりより一層ひどい眼で見られる事になるだろう

「むー、ちよつと納得いかないけど：じゃあ選んでくるからちよつと待つててね！」

「ああ、ゆつくり選んで来い。約束したからな、何でも買ってやるよ」

うん！、と笑顔を浮かべグッズのコーナーに入り色々物色しに行った

シロエが商品とにらめっこをしているのを見ていると

「連太郎！これとかどうだ？」

「俺が斬られ役とかにされそうだから却下」

「じゃあこれはどうだ？」

「それ着て『連太郎の趣味なのだ！』とか言いそうだから却下」

「むー！連太郎は文句が多いぞ！」

ちよつと自分と、そしてシロエと同年代ぐらいの二人が買い物をしていた

どうやらあそこにいる彼も天誅ガールズのグッズの買い物に付き合わされているよ



うだ

その彼と一緒にいたツイインテールの少女はもう一度グッズコーナーへと走っていき  
次の商品を探しに行った

「お兄ちゃん！」

どうやらこっちは買う物が決まったようだ

シロエに手を引かれ俺たちはレジへと向かった

「ふんふんふん♪」

デパートでシロエのプレゼントを買ってから食材を買い終わり街中を歩いているが、  
シロエは手首に着けている自分と俺の物を見てはずっと機嫌がよく鼻歌を歌っていた

「そんなに気に入ったのか？」

「うん！だってお兄ちゃんとおそろいだもん！」

俺とシロエの手首に着けている物はシロエが選んだブレスレットだ

なんでもこのブレスレットは天誅ガールズの魔法少女たちが嵌めている仲間の証であり、嘘をつくときひびが入って割れ嘘をついた事がばれてしまうそう

値段はこんなおもちやのブレスレットでもなんとへ6980円だ

最近の子どものおもちやは子どもに幸せを与える代わりに、大人に涙を与えるらしいだが、これも妹のためであり、自分が蒔いた種であると腹を決めたのだ

妹の笑顔を見られてよかったがその代償は決して軽い物ではなかった

そのまま兄妹仲良く手をつないで帰路を歩いているとビルに備え付けられている大型のディスプレイに一人の女性が多くくの記者達に囲まれ記者会見している映像が流れていた

その女性は雪をかぶせたような真っ白な服装にシロエとは少し違う銀髪だった

そう、この女性こそこの東京エリアのトップであり統治者である聖天子様なのだ

記者会見の内容はどうやら聖天子が発表した新しい法律『ガストレア新法』について  
のようだ

この法案は呪われた子どもたちの基本的人権の尊重に関する事で、これが通れば外周  
区で暮らす事を余儀なくされている呪われた子どもたちにも戸籍などが与えられ

普通の生活を送れるようになるだろう

呪われた子どもたちは体内にガストレアウイルスを保持している事とその瞳がガストレア達と同じように赤く染まることから周りから畏怖され、差別をされているのである

いや、差別なんてそんな生易しい物じゃない

呪われた子どもたちのほとんどはもつとも幸福とはかけ離れた所にいる

親に化け物扱いされ捨てられるなら不謹慎ではあるが、まだマシなものだ

呪われた子どもたちはガストレアウイルスの恩恵により、バラニウムによる攻撃でなければ考えられないほどの高い治癒能力があるためそれをいいことに肉親から虐待を受ける者もいるし街中ではガストレアに恨みを持つ大人にリンチにされる今世界で生きている人間のほとんどはガストレアに恨みを持っており、同時に呪われた子どもたちもガストレアと同様に見ているので人間ではなく化け物として扱い、その恨しみを呪われた子どもたちで晴らそうとするのである

一昔前では出産を川近くで行いそのままそこで殺していたのが普通であるぐらいだった

だからこそ

「ガストレア新法、通るといいねお兄ちゃん」

「ああ、きつと通るさ。そしたらみんながみんなが幸せになれる」  
「うん！」

そのまま通りを歩いていると通りの向こうに人が集まっていた

だが距離が開いていても聞こえるほどの怒声と、集まった者達がだしているだろう異様な空気を感じて四郎は嫌な予感が体中を駆け巡り不快感を感じた

四郎はこういつた直感はず普通の人よりも優れており、大抵こういつた時は最悪な出来事しか起こらない

四郎は隣のシロエに視線を送ると少し怯えていた

あれだけの人の負の感情が例え自分に向けられていなくても、シロエもそういつた者には敏感なためになんとなく感じているのだろう

「なあ、あんた。この騒ぎは何なんだ？」

「あん？警備員を半殺しにして盗みを働いた『赤目』が逃げてんだよ！」

近くにいる青年に話を聞くが、『赤目』というのは呪われた子どもたちの事だろうそんなとき人ごみから一人の少女が人ごみの中から飛び出してきた

少女の手には食糧が詰め込まれた買物かごを持っており、服は長い間洗っていない事が分かるほど汚れており何度も修復した跡が見られるほどボロボロであった

そしてその少女の眼は緋色に染まっている

あの少女がさっきの話の呪われた子どもたちであり、店から商品を盗んだのだろう。その少女は後ろから追いかけてきていた店員と思われる人物とその他の大人に捕まり、地面に組み伏せられていた

呪われた子どもたちの腕力は大人の男性よりも強いがあれだけの人数の大人に上から抑えられれば、力も上手く出せず僅かに身じろぐことしか出来なかった

そんな少女に向かって周りの者たちは口々に罵倒する

「東京エリアのごみ」「ガストレア」「人殺し」「赤鬼」「死ね」

「消えろ」「出ていけ」「化け物」「クズ」

憎悪をむき出しにして容赦なく少女の心を傷つけていく

僅かやり過ぎなような気もするが、後は警察が来るのを待ち彼女の身柄を渡せばこの件は終わるだろう

可愛そうではあるがいくら飢えに苦しんでいたとしても犯罪が許されるわけではない

だが、自分の直感が未だに警鐘を鳴らす事を止めることはなかった  
あの尋常ではない空気からこのまま穏便に終わるとは思えなかった

「シロエ、俺は…」

「うん、大丈夫だよお兄ちゃん。私の事は気にしないで」

一緒に暮らして十年ほどもいるためか、シロエは四郎の言おうとしてる事が分かつているようだった

それに対し四郎は

「ありがとう、シロエ。すぐに戻ってくるから、安心しろ」

「…昨日みたいに遅くならいでよ」

「ああ、約束する」

シロエの頭の高さにまで顔を屈めサラサラで触り心地の言い銀色の髪を撫でながら優しく笑う

シロエは少しくすぐったそうにしており撫で終わると先に家に帰った

俺はすぐに人ごみの中をかき分けながら今もなお苦しんでいるだろう少女の下に向かう

なんとか人ごみの中を抜けると、抑えられている少女が助けを求めするように店で見かけたあのツインテールの少女に手を伸ばしていた

そしてツインテールの少女もその手を掴もうとする

だけど、その手を掴むことはなかった

その手をツインテールの少女と一緒にいた男が払い落したからだ

その男の眼は険しく、『自分達を巻き込むな』といったような明確な拒絶の態度だった

それを見た俺はあの時の光景が再現された

…救いを求める手を全て無視し、ただ自分の身可愛さに他を見捨てた自分の姿が

「ツー」

それを思い出し気分が悪くなり、額に嫌な汗が浮かんだが無理やりに抑える

今はあの少女を助ける事が先だ

少女は男の態度を見て怯えており、手を取ろうとした少女も「何故？」と言いたげな表情だった

「貴様ら…そこで何をしている!」

人ごみが道をあけた先には事態を聞きつけたメガネをかけた痩せた男と小太りの二人の警察がやってきた

それを見て俺は内心胸をなでおろした

これでこの一件は終了し少女も身柄を確保されてこの空間から抜け出せると

二人組の警察は周りを見て状況を悟ったのか少女を周りの人たちと同じように冷た

い眼で見降ろす

警察は周りから評際を聞かずに少女の手に手錠をかける

俺はギョツとして抗議する

「おい待てよあんた達！何してんだよ！」

「見れば分かるだろう？市民を脅かす化け物を連行しようとしてるんだよ」

「その子が何をやったのかちゃんと分かっているのかよ！なにも聞かずに手錠をかけてたじゃないか！」

「ふん！こいつらが何をやらかしたのかなど聞かなくても分かる。」

どうせ窃盗か傷害といったところだろう」

「そんないい加減な事でそんな幼い子を捕まえるのか！それが警察のやる事か！」

「ならこの場で聞いてやろうか？皆様！この化け物はどんな悪行を行いましたか！」

皆様の安全のため、協力をお願いします！」

すると静まり返っていた一気に騒ぎ立て始めた

「お巡りさん！そいつは盗みを働いた上に止めようとした警備員を半殺しにしてたぞ  
！」

「そうだ！ちゃんと見てたぞ！そいつが警備員を無慈悲に暴行を加えたところを！」

「そいつをとつとと牢屋にでもぶち込んでくれ！暴れでもしたら危険だ！」



「牢屋にぶち込むなんてことせずこの場で殺してくれ！そいつらは人間を襲う化け物だ！」

「その通りだ！この場で殺しちまえ！」

周りの人たちは彼女が犯したであろう罪を叫び牢屋に入れろと、終いにはこの場で殺せと言う者までいた

それを聞いた痩せた警官はこちらを見てにやりと口元を歪めた

「これで分かっただろう？皆様！ご協力ありがとうございます！この化け物は我々

警察が責任を持って罰しますのでご安心下さい！」

警官の言葉に周りの者たちは喜びと感嘆の声を上げる

それに気をよくした警官はそのまま少女をパトカーの中に押し込む

それを止めようとすると警官は事らをギロリと睨みつけ

「貴様。これ以上邪魔をするようなら貴様も公務執行妨害で逮捕するぞ！」

「そうだ！引っこんでろ！」

「なんで化け物の肩を持つとうとする！」

「お巡りさん！その化け物をとつとと連れてつてくれ！」

警官の言葉と周りの非難を浴びせられる

公務執行妨害で捕まるのはごめん

俺には守らなきゃならないものが、成し遂げなきゃならない事があるからでも、だからって目の前の出来事を無視する事は出来ない！

「正直に答えてくれ。君は本当に盗みをして、警備員に手を出したのか？」

周りの言葉は無視して少女に問う

優しく”絶対信じる”という心をこめ目を正面から見て問い掛ける

それが伝わったのかは分からないが少女は泣きそうな顔で答えた

「確かに食べ物は盗んだけど、誰にも暴力なんて振ってない！これだけは本当！」

必死に答える少女に周りは「嘘をつくな！警備員もお前が襲ったんだろ！」と叫んでいるが気にしない

俺は微笑んで少女の頭を優しく壊れ物を扱うように撫でる

「わかった。君が嘘をついていないってことは、十分に分かったから」

立ち上がり頭を下げる

「この子がやった事は確かに犯罪だ。でもこの子はちゃんと自分の事を話した。だからこの子の罪を咎めるのはちゃんと調べてからにしてくれないか？」

誠心誠意をこめて警官に頼む

その時警官は怒りに染まった顔をするが次の瞬間、良からぬ事を考えたように顔を

歪めた

「ほう、そんなに言うなら貴様にも一緒に来てもらおうか？今ならこの無礼はなかつた事にしてやってもいいぞ？」

ゲスにまみれたような顔をする警官は、ここまで言えば俺が引くと思つていのだらう

「ああ、分かつた。一緒に連れて行け」

即答する俺にまたしても警官は顔を怒りで歪め乱暴にパトカーの中に入れ運転する

「おい。俺の記憶が間違つていないならこっちは確か警察署はじゃなくて外周区のはずだが？」

運転する事数分、俺たちを乗せたパトカーは明らかに行き先がおかしかった

既に壊れたまま放置されている建造物などがある外周区近くに來ていた

一緒に乗せられている少女はこれから連れて行かれる所に不安があり怯えていたの

で大丈夫だ、と少しでも恐怖を取り除く為に頭に手を乗せ声をかける

少女は俺の服の裾を掴むと少しは落ち着いたようだ

ようやく停車したところは警察署などではなく廃屋の前だった

すると警官二人はいきなり銃を突きつけてきた

「とつとと降りろ。撃つぞ?」

その脅しが本気である事が分かり俺たちはおとなしくそれに従う

歩け、と命令され後ろから銃を突きつけられたまま廃屋の中に連れて行かれる

その最中、少女はこれから起こる事に青ざめ裾をつかむ力が強くなる事が分かった

「貴様もバカだな。こんな化け物をわざわざかばわなければこんな事にはならなかつた

ろうに」

「生憎、俺は大がつくほどのお人よしって言われてるんでね」

「ふん、下らん正義感で動くから死ぬことになるんだ。今からでも謝って消えると言う

のであれば見逃してやらんでもないが?」

「お気づかいどうも。それにしても警察が正義を否定していいのか?それになんだか手

慣れてるな、前にもこんなところをした事でもあるのか?」

「ああ、あるさ。なんせこの餓鬼どもはいくら殺しても罪にならんからな。」

化け物退治も出来てストレスの発散になるからなあ、いくらやっても飽きない」

「あんた、本当に警察じゃないだろ？テロリストの方がよっぽど似合ってるぞ」  
「なんとでも言え。長話も終わりだ、死ぬ」

警官二人が俺たちに銃の銃口を定め引き金をかけたのが見えずとも分かった  
だがここで死ぬつもりなんて毛頭ない

俺はこの状況を打破する、隣で死に恐怖する少女を救うための呪文を唱える

トレス、オン  
「同調、開始」

俺という存在を現す呪文を唱え魔術回路を開く

体の中にあるもう一つの神経とでも呼べるものに魔力を流し込み強化の魔術を起動  
する

強化によって底上げされた身体能力でこの場の誰よりも早く動く

隣にいる少女を突き飛ばして銃の射線外に出し深く、低くしゃがみこむ

銃の発砲音が聞こえ銃口から発射された銃弾が頭の僅か上を通り過ぎる

体を捻りその勢いのまま瘦せた男の横腹に蹴りを叩きこむ

直後、蹴られた警官は吹き飛び壁に叩きつけられる

一瞬、何が起こったのか分からず茫然とする小太りの警官に肉薄し鳩尾に掌底を放つ

内部に浸透する振動に小太りの警官は目が限界まで開かれ口が半開きとなり白目を

剥いて気絶した

「ぐう、この、化け物が！」

瘦せた警官は銃を構え発砲する

だが、それだけでは足りない

衛宮四郎にとって正面から放たれた銃弾など脅威にはなりえない

四郎は半歩横にずれるという最小限の動きでかわし男に向かつて走る

警官は続けて発砲するがそのどれもが四郎には当たる事はない

弾丸をかわしながら警官に接近する

「うおおおおおおお!!」

咆哮を上げ固く握った拳を叩きこむ

「ゴハアツ!!」

口から空気と唾液を吐きだしそのまま地面に転がる

それを見ていた少女も未だに何が起きたか理解していなかった

四郎は踵を返し少女の下に向かう

「大丈夫だったか? いきなり突き飛ばしたりしてごめん。どこか怪我したところはな  
いか?」

「こちらを心配した声音に先程の警官を倒したときとは別人のような四郎に困惑する

「あの、今のは、いったい…」

「ん？ああ、言ってなかったね。実は俺はね…」

一度区切り四郎は少女に言う

「俺は…魔法使いなんだ」

### 第三劍 「それぞれの胸中」

「(クソツ！何やってんだ俺は……)」

里見連太郎は暗い夜道の中苛立っているためその不幸そうな顔はいつも以上に陰気な雰囲気纏っており

通行人が彼の顔を見れば怪訝そうに見るほどひどいものとなっていた

連太郎は自身の相棒であり居候である延珠と一緒に買い物に行った帰りにある騒動に出くわした

外周区の『呪われた子どもたち』が盗みを働いたのだ

追われる店員から逃げる少女は延珠を見ると同時に助けを求めるように手を伸ばしてきたのだ

一般人に溶け込んでいる延珠をなぜ少女は自分たちと同じ『呪われた子どもたち』である事が分かったのか

分からなかったがその助けを求める手を延珠は取ろうとしていた

だが、ここで延珠がその手を取ると延珠の正体もばれてしまうのではないか？  
そうなれば延珠もただではすまない



かつての大戦で生き残った者の中にはガストレアに友人、家族などを殺された者等は  
大勢おりそんな彼らは

ガストレアと同じウィルスを持っている『呪われた子どもたち』をガストレアと同一視  
しており隠そうともしない憎悪が垣間見えるのである

中には彼女らを差別、軽蔑しないもの者もいるがそれはごく少数の者達でこの世の  
人間のほとんどは彼女たちを化け物として見ている

まだ10歳にも満たない少女たちを暴力のはげ口にすることも当たり前になるほどこ  
の

世界は狂っているのだ

このままでは延珠もこの少女に巻き込まれてしまう

そう思うと同時に連太郎は少女の手をはたき、拒絶の態度をとっていた

そのあとやってきた警察官によってすぐにこの騒動は終わると、連太郎は安堵した  
だがそれは最悪の形で終わることになった

警官たちはその少女が『呪われた子どもたち』と分かると冷たい態度となり何の事情  
も聞かず手錠を嵌めて連行しようとしたのだ

思わず絶句する連太郎だったがそれだけで何の行動にも出れなかった

そこへ

「おい待てよあんた達！何してんだよ！」

警官たちに抗議する奴がいた

赤銅色の髪に琥珀色の眼、自分と同じぐらいの年の青年だった

その男は警官の脅しや周りの避難にも一歩も引かず一人反論した

出来る事なら彼に協力して反論したかった

だが自分は何もすることは出来ずただ延珠がこの話に割って入らないようにするしかなかった

結果、警官たちは少女と反論した男をパトカーに乗らせ連行されていった

それを見ているだけしか出来ない自分に心底腹が立った

その騒動が終わった後、延珠になぜ彼らを助けなかったと非難され、あの少女が知り合いだと言う事を聞き延珠を帰らせ急いで彼らを探しに行った

外周区まで行つたところをやつと警官たちとすれ違つたが彼らは一緒にいなかったもしかしたらあの少女を外周区に送り返したのか、と一抹の希望を持つがあの騒ぎのときの警官の態度からそうだとは思えずそこから一帯を探す

もうすでにどこかであの警官たちに始末されたのでは、と最悪な考えが浮かび探し続けるが結局彼らを見つucker事は出来なかった

「民警は無辜の市民を守る正義の味方だ、と木更は言っていた

「連太郎は正義の味方で何でもできる、と延珠は言っていた

「何が無辜の市民を守る正義の味方だ！

「なら何であの少女の手を払った？

「なんであの男と一緒に助けに入らなかった？

「自分はただなにもせず彼らが連れて行かれるのを許容して傍観していることだけ

「だった！

「激しい自己嫌悪に蝕まれる連太郎に出来る事は彼らがどうか無事でいる事を祈る事  
「だけであつた

私のお兄ちゃんはどうな人？と聞かれたら私は迷わずこう答えるだろう

私のお兄ちゃんは正義の味方だよ！と

お兄ちゃんはいつも誰かの為に行動していて困っている人がいたら手を差し伸べていた

文句を言うことなく頼まれた事は断らず引き受けていた

そして、お兄ちゃんはいっだって私の味方をしてくれた

私が泣いてるときは励ましてくれて、私が落ち込んでいたらそばにいてくれて、私がお兄ちゃんを言ってもお兄ちゃんは聞き入れてくれた

以前、私がガラの悪い大人たちに絡まれていた時もお兄ちゃんは自分よりはるかに大きい相手に怯むことなく私を守ってくれた

生まれてきてから家族がいなくて寂しくて不安になった時、お兄ちゃんは言ってくれた

『大丈夫だシロエ、俺がついてる。俺は何があってもお前の味方だ。』

例えこの世界を敵に回しても俺はお前の正義の味方になる。

だって、俺はお前のお兄ちゃんだからな』

あの日、そう言ってくれたお兄ちゃんの顔は優しく覚悟に満ち溢れた顔だった  
だから私は信じられる

お兄ちゃんは誰にも負けないし私を置いていかない

そう約束してくれたから私はあの人を待っていられる

でも、今は無理でもいつか私はあの人隣で支えられるようになりたい

『ただいまシロエ、今帰った』

玄関が開いた音の後に私が誰よりも知っている声が聞こえてきた

その声が聞こえてきた時私の頬が緩んだ事は秘密だ

そして私は玄関に向かい最高の笑顔で出迎えた

「おかえりーお兄ちゃんー！」

## 第四劍 「悪からの誘い」

「それじゃあシロエ、その子を風呂にまで案内してやってくれないか？その間に晩飯の準備をしておくからさ」

「わかった！それじゃあ一緒に入ろう！私が洗ってあげるから」

「え、あの、ちよつと……」

「ほら遠慮しないで！早く早く！」

戸惑う少女を引つ張つてシロエは風呂場へと入っていく

あの少女をここに連れてきたのは行くあてもなかったようだしあんな怖いめにあつて不安もあるだろうから

今日のところは家に来てもらつてゆつくりと休んでもらおうと思つたからだ

最初は戸惑つていたが一人だと心細いためおとなしくついてきてくれたのだ

少女を連れて風呂場へ行くのを見届けてキッチンに行こうとするとシロエが戻つてきた

「どうしたシロエ？着替えなら俺が後で持つていくぞ」

「お兄ちゃん……覗かないでね」

「そんなことするか！ いいからちやっちやと入ってこい！」

「はい♪」

シロエは少し楽しげに風呂場へと戻っていく

にしても、なんてこと言うんだ。そんな事するはずがないのに

妹からしたら軽い冗談なのかもしれないが俺からしたら冷や汗ものだ

もしさっきの会話を第三者にでも聞かれたとしたら俺にあらぬ疑いの眼差しを向けられるかもしれない

危険なものだ

妹の俺に対する印象が若干心配になってきた

俺は一度さっきの会話を胸の中にしまいこみ調理に専念する

今日はもともと普通のカレーにするつもりだったが少しアレンジを加えることにした

今日買ってきた物等の必要な食材を取り出し野菜を水洗いしていく

人参、玉ねぎ、ピーマンをみじん切りにする。ピーマンはまたあとで別に加えるため分けておいておく

フライパンにオリーブ油とニンニクを入れて火にかけ、油にニンニクの匂いが渡った豚のひき肉を入れて

炒め、さらにそこに絞ったしょうが汁を投入する

みじん切りにした人参と玉ねぎをいれて水と塩を加えて野菜が柔らかくなるまで煮る

ピーマン後で一緒に入れる

柔らかくなったらトマトピューレ・カレールウを入れ、熱湯で湯がいたレーズンを入れて完成だ

レーズンはどちらでもいいのだがアクセントになって美味みがでるのでオススメだ  
これなら栄養も高く食べやすいだろう

ちなみに甘口だ。シロエもだけどまだ子供だからこれぐらいがちょうどいいだろう  
後は皿によそって完成というところでシロエ達が風呂から上がってきた

二人とも風呂上がりであるため体から湯気が出ており髪にはまだ水気が抜けきっていないかった

シロエは言わずもがなだったが少女の方も体や髪をしつかりと洗ったため手入れのされていなかった髪は綺麗に後ろに三つ編みにされており本来持っていた可愛さが出ておりそこらの小学生に比べると10歳とは思えないほどの色気が出ていた

「はー、さっぱりしたあ。やっぱりお風呂は良いね！まさに人類が生み出した至高の文化だよ！」



「確かに風呂はいいものだけどそれは大げさすぎないか？」

「そんなことないよ！女の子にとってお風呂は必要不可欠だから！クウちゃんも気持ちよかったよね！」

「え!?う、うん。暖かくて、気持ちよかった…」

シロエがクウと呼んだ子に同意を求め戸惑いながらも同意していた

「そ、そうか。所でその子の名前はクウって言うてたけどもうあだ名で呼ぶほど仲良くなれたのか？」

「ううん、クーちゃん名前がないって言うてたから私が考えたの。ちゃんとクウちゃんの子承は取ったし」

クーちゃんも喜んでくれたから。ダメ…だったかな？」

シロエは勝手に決めた事に不安げに上目遣いで見てきた

俺はそんな様子のシロエに優しく微笑んで頭をなでる

「その子もその名前が気に入ってるんだろ？だったら俺がとやかく言う資格はないよ。むしろその子の喜ぶ名前を付けてあげたんだから起こるはずがないだろ」

「…うん！ありがたうお兄ちゃん！」

「ああ。それじゃあそろそろ飯にしようか！今日はカレーだ！」

「本当!?やったー！」

シロエはクウちゃんの手を引いて席に座らせ自身も席について早く早く!と急かす  
俺はそれに苦笑しながらカレーをよそって二人の前に置き自分の分をよそう

「それじゃあ手を合わせて「あ、あの!!」ん?どうした?」

いざ食事の挨拶をしようとしたところでクウが制止する

「なんで…そんな普通にしてられるの?私は、『呪われた子どもたち』なんだよ?なのに  
何でこんな普通にしてられるの?たすけてくれたの?怖くないの!」

不安が込められたその声は小さくとぎれとぎれだったが途中から溜まっていた感情  
が爆発し声を張り上げる

クウちゃんのその問いに対し俺は

「なんで怖がる必要があるんだ?それに助けた理由だって困ってる奴がいたら助けるの  
は普通だろ?」

それが常識であるかのように言う

「でも、私は普通の人間じゃないんだよ?化け物なんだよ?」

「クウは化け物なんかじゃない。俺たちと同じ人間だよ。俺の目の前にいる君は俺から  
したら

普通のかわいらしい女の子にしか見えないよ」

「でも、でも…!」

俺は壊れ物を扱うようにクウの頭を撫でながら目元に溜まっていた涙をぬぐった  
 「もう我慢しなくていいんだ。泣きたいときは泣けばいい。素直になつていいんだ。君は十分苦しんだ。」

これ以上君が傷つく事なくともいいんだ」  
 だから、と続け

「泣きたいときは泣いてもいいんだ。甘えたいときは存分に甘えてもいいんだ。クウはまだ  
 まだ

子どもなんだから、大人である俺に甘えてもいいんだ」

クウは俯いていて表情は見えないが体が少しだけ震えておりやがて声を絞り出す

「……………本当に……………いいの？」

その小さな問いに

「ああ、いいよ」

と、答えたと同時にクウが飛びついてきた

「うう、グス、わだじ、ずっとときみ、しくて…でも！誰にも、頼れなくて…！」

「ウワアアアアアアアアン!!!アアアア!!ウアアアアアア!!」

俺の服をつかみ、喉の奥から張り出された泣き声をただただ枯れるまで上げ続けていた

そんなクウに俺は何も言わずただ黙ってクウの背中をさすり泣きやむまで付き合っ  
た

「すう、すう……………」

あの後泣きやんだクウは大声で泣いていたのを見られて恥ずかしいのか、ずっと俯き  
がちで目線が合うと

慌てて逸らされた

その態度にシロエは少し面白くなさそうな顔をして腕をつねられた

なんでさ

そのあととは作ったカレーを暖かいうちに食べて喜んでくれたのは作った身からした  
ら満足だった

食べ終わった食器を片づけている間シロエはクウに天誅ガールズを見せていた

すぐにクウもはまったようので二人の楽しそうな会話がこちらにまで聞こえてきて

こっちもいい気分になった

今は天誅ガールズを見続けていたせいで疲れて寝てしまったらしい

本来なら注意しなければならぬのだろうが、今日ぐらいいいかと許してしまうあたりやはり俺は

少し甘いのかも知れない

うーん、ここは厳しくしかるべきなのだろうか？でも今回ぐらいいは別に…悩むなあそんな事を考えながら二人をおぶってベッドに入れる

二人ともとても気持ちのよさそうな寝顔を浮かべており先程まで考えていた事がどうでもいいと思えてきてしまった

この幸せを壊させるわけにはいかない

だから……この幸せを害する敵を排除しに行くとしよう

四郎が部屋から出て言った時にはさつきまでの優しそうな笑顔ではなく

どこまでも冷たく、心を殺したかのような冷酷な魔術師の顔であった

四郎が家を出てから少しして自分を追っている気配を確認しながら人気の少ない道通りまで来て漸く止まる

「わざわざ人がいないところまで来たんだ。いい加減に出てきたらどうだ？」

誰もいない所で四郎がそう口にすると角から二人の人影が出てきた

「気づいてたんだ？ ねえ、パパ。やっぱり斬っていい？」

「よしよし、だがまだ駄目だよ」

「むうー、パパ」

「それはそうとやはり気づかれていたか。一体いつ気付いたんだい？ 参考までに教えてくれないだろうか？」

「最初からだよ。そっちの子から殺気が漏れてからな、案外早く気づいたよ」

影から出てきて四郎に問い掛けたのは昨日襲ってきた仮面の男でありその傍らに小

刀を持った

藍色の髪の少女だった

「ふむ、それでも常人が気づけるほどのものではなかったはずなのだが。やはり君は面白いね。

そう言えば自己紹介がまだだったね。私の名は蛭子影胤。こっちは娘の子比奈だ」

「御託はいい。用件は何だ？俺を始末しにでも来たのか？」

「いやそんな事ではない。単刀直入に言おう、私の仲間にならないか？衛宮四郎」

「何？どういう意味だ？」

いきなりの勧誘に四郎は相手の意図がなんなんのか図ろうとする

「そのままの意味だよ。私は今ある計画を進めていてね、そのために君の力を貸してほしいのだよ」

「何で俺なんかを勧誘するんだ？仲間がほしいなら俺みたいな奴じゃなくても他にもいるだろ？」

「何大したことではない。私が君を気に入ったからだ。昨日の君のあの眼が私はとても気に入った。

あれは並大抵の人生では得る事の出来ないものだからねえ」

ヒヒヒ、と笑うとそのままだ仮面の男はハンカチを手の上に乗せ取り払うとそこには銀

のアタッシュケースが

あり、それを開くと中には大量の金はいっていた

「もちろんただというわけではない。協力してくれるというのならこの金は君に譲ろう」

「こんなことをしてまであんたは何がしたいんだ？あんたの目的はなんだ？」

「昨日も言っただろう。私は世界を滅ぼすものだ。君は一度もこの東京エリアの在り方は間違っていると

思った事はないかね？」

そう言われ昼間の事を思い出す

10歳足らずの少女に過度なまでの対処に周りからの悪意にあふれた暴言の嵐、極めつけは少女を庇った

自分さえも殺そうとした警官。正直なところ間違いなく普通ではなく狂っていると  
言っているだろう

そんな四郎の様子に気づいたのか仮面の男はさらに言葉を続ける

「私とともに来い！衛宮四郎！君もこの世界には不満を持っているだろう？私とともに来ればこれから

訪れるであろう『大絶滅の嵐』からも逃れる事が出来る。共に世界を変えようではな



いか！」

腕を広げ高らかに言い放つ。

四郎はそれを見てフツ、と口元を皮肉気に歪ませて一笑する

「何がおかしいと言うのかね？」

「別に、ただあんたは大きな勘違いをしてるってだけだ」

「勘違い？」

「確かにこの世界は狂っている。かつての大戦によって人間という種、そのものがおかしくなった。

兵器開発は以前より活発になり、一般人でも自己防衛なんていう体のいいもので武器を持つ事を

許されている。警察も平気で人殺しをする奴もいるし簡単に死が訪れる世界になった。そしてその中でも

一番被害が出ているのは呪われた子どもたちだ。殺しても罪に問われないから怒りの矛先を彼女たちに

向けて簡単に殺す。異常すぎる」

「それが分かっているのなら、私と組むべきではないのかね？」

「だからそれが勘違いだと言ってるんだ。確かにこの世界は異常だと散々言ったけど

俺にとってそんな事は些細な問題なんだよ」

それを聞いた仮面の男―蛭子影胤は一瞬相手が何を言ったのか分からなかった。自分の目の前にいる少年はこの世界の異常性が分かっているが、それらを些細な問題だと言いきったのだ。

平和な国であった日本がこんな堂々と兵器を開発できているのはガストレアへの対策としてだ。

だが、武器というものは使うものによって誰にでも牙をむく道具だ。

そのせいでガストレアを倒す一方、民警や一般人による殺害件数も大戦前よりはるかに大きく治安も

いいと呼べるものではない所もある

武器があるだけで人は簡単に自分の為に使う事がこの世界ではそう珍しい事ではない

ある意味この世界において小さくない問題をこの少年は分かっているが、些細な問題だと言ったのだ。

まるで自分には関係ないと言わんばかりに

「あんたが俺の言った事が理解できないのは分かる。だからこれだけは言っておく

俺はある人に救われ、ある人に憧れ、そしてそのある人になる事を拒んだ。あの時、あの人のように

なる事を拒み、あるものを目指したときから俺は、ある一つの味方でありそれを害するものは

例え友であろうと仲間であろうと呪われた子どもたちであろうと聖天子だろうと世  
界であろうと………

俺の敵だ。そして今のあんたはそれを害するもの。

つまり、俺の敵だ」

これを聞いて影胤は少年の言ってる事はほとんどが分からなかったが一つだけ分  
かった事があった

それも自分にとつて面白い事が

「フッフ、ハハハハハハハハハハハハ！そうかそういうことか！君も私と同じように  
狂っているということか！いや、この場合は壊れてると言うべきかな！君は本当に私の  
予想を超えてくれるねえ。」

実に面白い！」

だが、

「そうなる君は私達の計画の邪魔ものというわけだ。なら、ここで排除しておかなければならないね。」

子比奈、予定変更だ。彼を斬れ」

「やった！パパ大好き！」

影胤の許可が下りた影胤の娘―蛭子子比奈は嬉しそうに喜ぶ

そして二本の小刀を構え狂気に染まった顔をする

「それじゃあ四郎。死んでねー」

そのまま地面を蹴り少女とは思えないほどの速さで四郎に接近する

本来、人間がイニシエーターに勝つことは出来ない

イニシエーターは人間が出せる力の何倍もの力をガストレアウィルスの影響によって引き出す事が出来る

そんな彼女らに勝つことはほぼ不可能なのだ

それに加えて四郎は何の武器も持っていない

このまま迫りくる刃に斬り裂かれその生涯を終えるだろう

それが普通の人間ならばの話だが

迫る子比奈に四郎はただ冷静に相手と渡り合うための武器を想像する

自分が最も使い慣れている『剣』を

体の中の魔術回路を開き魔力を流し込み頭の中に武器の設計図を思い浮かべる

イメージは銃の撃鉄

「トレスオン  
投影開始！」

想像理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

蓄積された年月を再現し

今ここに、幻想を再現する！

ガキイイーン！と鉄と鉄がぶつかる音が響き子比奈の小刀が防がれる

先程まで何も持っていなかった四郎はどこから取り出したのか二本の白と黒の中華

剣で子比奈を防いだ

子比奈は自分の攻撃を防がれた事に驚きながらもそのまま小回りのきく小刀を二本  
使い高速で

斬りかかってくる

そのすべてを四郎は防ぎ切り、それだけにとどまらず足払いをかけ体勢を崩す  
そこへ中華剣を振りおろすが子比奈は体の前で小刀をクロスして防ぐ

だが踏ん張りが利かなかつた為影胤の下まで吹き飛ばされた

「君は……本当に何者なんだい？」

影胤は動揺を隠し切れていない声で四郎に尋ねる

「そうだな。かつて正義の味方を目指し、それを拒んだ悪……と言ったところだな」

## 「第五劍 青空教室の子どもたち」

「おーい！お兄ちゃんもクウちゃんも遅いよー！」

「待ってよシロエちゃん！」

「早く行きたいのは分かるけど、危ないから足元には気をつけろよ」

はーい、と返事を返すシロエは駆け足で先へと向かいクウちゃんはシロエを追いかけ  
ている

会った時は余裕がなく鬼気迫る顔つきだったが今ではそれも大分解れており、ポロボ  
ロだった衣服もシロエの服のワンピースと麦わら帽子を被っており、年相応のかわいら  
しい女の子の様子を見てあの時助けられて本当に良かったと思つた

そんな事を思い返しなが、シロエ達から距離が離れすぎないように背負っている荷  
物が揺れないように

歩く脚を速めた

昨日の夜、仮面の男『蛭子影胤』とその娘である『蛭子比奈』から勧誘をされた後、交戦した。

明らかに通常の民警よりも圧倒的に強者であろう二人相手に素手で勝てるほど甘くはないと判断し、一部の

者しか知らず一般の人間には人うしななければならない魔術——『投影魔術』を使い応戦した

投影した干渉・莫也という二振り以对の中華剣を振るい交戦するも相手も流石は親子というべきか

巧みな連携を前に攻めあぐねた

いくら夜で人目のつかないような場所であつても何度も銃声や剣戟の音がすれば周りにも勘づかれる

またしても警察が近くまで来たため撃退には成功したが仕留めるまでにはいかなかった

影胤は去り際にこんな事を言い残していた

「今日はここで打ち切りになりそうだ。そうだ！今私と民警達でレースをしているんだ。君が私を

殺すというのならそのレースに参加するといひ。そこで今度こそじっくり殺し合お



うじゃないか」

「じゃあね、四郎。次は斬るから！」

そう言い残して逃げられてしまった

あいつらが言っていたレースというのは何の事かは知らない為、ある奴に伝手で探つてもらふことにした

あいつに借りを作るのは嫌だけど、嫌だけでも！こうする以外に情報が手に入りそうにないため仕方なく

あいつに依頼しておいた。

依頼したことに多少後悔の念を覚えつつ少し憂鬱な気分には陥っていると目的の場所が見えてきた

周りは瓦礫が積み上げられているがそこだけは瓦礫が撤去されておりでこぼこの地面も綺麗に

整えられており使い古された黒板と長机に椅子があり、7〜10歳ぐらいの少女たちと初老の老人が授業を

していた

「みんなー！おはようー！」

「ん？あ！長老！みんな！シロエちゃん達が来たよ！」

「え!?ほんとだ!四郎お兄ちゃんもいる!」

「もう一人知らない子もいるよ!」

シロエが呼びかけると全員がこちらに気づき顔を輝かせて大はしやぎしてこちらに駆け寄ってくる

「シロエちゃん久しぶり!元気だった?」

「うん!元気にやってるよ!」

「四郎お兄ちゃんも久しぶり!今日も来てくれたんだね!」

「ああ。今日は俺が皆に勉強を教える日だからな。約束はちゃんと守らないとな」

「別に勉強だけじゃなくてもいつでも来てね!」

「そうか?ありがとな。暇が出来たら来るようにするよ」

「ねえ、四郎さん。後ろの子は誰?」

「新しい子?」

「そうだったな。クウ、皆に挨拶できるか?」

「う、うん!」

俺の後ろに隠れて帽子を掴んで顔を隠していたクウは少し恥ずかしそうにしながら自己紹介した

「え、えと、クウって言います。よ、宜しくお願いします」

言葉が少し途切れ途切れになっていたが最後まで言い切ると、不安そうに他の子達の様子を見る

「うん！宜しくねクウちゃん！」

「クウって可愛い名前だね！」

「え？う、うん。シロエちゃんが考えてくれたんだ」

「そうなんだ！シロエちゃんグツジョブだよ！」

「えへへ、そうかな」

褒められたシロエは照れ臭そうに頭をかいてはにかんでいた。

くいつ、と袖が引つ張られ袖の方に視線を向けると一際幼い子をお願いしてきた

「えへへ、四郎お兄ちゃん肩車してー！」

「ああ、いいぞ。それ！」

「わーい！高い高いー！」

一度荷物をおろしてしゃがみこみ首からちゃんと脚がかけられているのを確認してから一気に持ち上げる

「あー！ずるい！私も四郎お兄ちゃんに肩車してほしい！」

「私もー！」

「わかったから、順番に…っとうわ!？」

他の子達が待ち切れずに俺の体に次々とぶら下がっていきその重量と勢いでバランスを崩しそうになるが

気合いで耐えきる

「負ける……かー!」

「わー!すごーい!」

「四郎お兄ちゃんすごーい!」

「これでも鍛えてるからな。これぐらい余裕だ!」

「じゃあ私も、えい!」

「え!?!いやこれ以上は……うわー!?!」

さらに乗りかかってきたため流石にバランスを保てず背中から倒れる

ぶら下がっていた子たちは驚いてすぐにその場から離れたおかげで誰かの下敷きになつたりして怪我をした子はいなかったが俺は思い切り背中を地面にぶつけることになつた

鈍い痛みが背中に走りじんじんと痛んだがここで痛がるそぶりを見せてしまつては他の子たちに多少の罪悪感を感じさせてしまうため平気な振りを装う

「シ……四郎お兄ちゃん大丈夫?」

「痛くなかつた?」

「いや、全然だよ。このぐらいいへっちゃらだよ」

「ごめんなさい、四郎お兄ちゃん」

「俺は大丈夫だよ。それよりも皆がこうして元気でいてくれる方が俺にとつては嬉しいからさ。だから、そんな悲しそうな顔じゃなくて笑った顔を見せてくれ。な！」

こちらにも笑った顔を見せれば少し暗い顔をしてた子たちも徐々に笑顔になる

「よし、それじゃあそろそろ皆戻ろうか！俺は松崎さんと挨拶してくるからおとなしく待つてるようにな」

「「はーい！」」

皆が手を挙げて返事をし、楽しそうに談笑しながら席に戻っていくのを一瞥してから少し離れたところで

こちらを微笑ましそうに見ていたこの青空教室の松崎さんの下に行き挨拶をする

「お久しぶりです松崎さん。授業の邪魔をしましてすいません」

「いや良いんですよ。あの子たちも衛宮君が来てくれるととても喜びますから。礼を言いたいのはこちらの方です。わざわざ週末に来てもらって子どもたちに授業をしてくれるのですから、やはり振るい教え方よりも新しい教えの方が何かと良い勉強になるでしょうし」

「と言つても、俺も成績が良いというわけじゃありませんし、ちゃんと教えられてるか不

安が残ってますけどね」

「いえいえ、あの子たちも衛宮君の授業を楽しそうに聞いて成績も上がってますよ。」

それに最近では腰が少しきつくて、もう歳ですかね。だから若い人手があるのととても助かるですよ」

「俺は好きでやってるだけですから。でもそう言ってもらえると嬉しいですね」

そこで話を区切り本題に入る

「それで松崎さん、お願いがあるんですが…」

「ああ、君が連れてきたあの子の面倒だね。構わないよ」

「本当にすいません。こんなことを松崎さんに頼むのは筋違いだと言うのに…」

「いやいや、君が街にいる子たちを連れて来てくれるおかげであの子たちも喜びますしそれに街よりも

こちらの方が住みやすい子もいるでしょうから、そんな子たちを連れてきてくれる衛宮君に感謝こそすれ

恨む事なんか何一つありませんよ。それに君には色々手伝ってもらってるからね。

こんなことでよければ

いくらでも構わないよ」

「本当にありがとうございます、松崎さん」

「いやいや。こつちの事はいいからそろそろあの子たちの下に行つてあげて下さい。あの子たちも衛宮君の事を待っていますから」

「わかりました。そうだ！松崎さん、これを預かつといてくれませんか？」

近くに置いておいた風呂敷に包まれた荷物を松崎さんに預ける

「これは…ああ、そういうことですか」

「後のお楽しみという事であの子たちには黙つといてくれませんか？」

「ええ、分かりました」

失礼します、と頭を下げてから今か今かと待つていた子どもたちの所へと向かい授業を始め

「じゃあ今日はここまでにしとこうか」

俺がそう告げると子どもたちは一気に力が抜けていき、だらんとなる

「やっと終わったよ」

「むずかしかったね」

授業が終わりそれぞれが談笑を始める

それにしてもみんなちゃんと復習もしているようで学校に通つてる子たちよりは学力は低いが

ちゃんと理解できているようである

「それじゃあそろそろお昼だしご飯にしようか。今日は皆頑張ったし、俺が作ってきたご飯を食べようか」

「「え!? 四郎お兄ちゃんの手料理!!」」

俺が作った物と分かるのと全員の眼が輝いたように見えた

「わーい! 四郎お兄ちゃんのご飯だー!」

「やったね! 授業頑張ったかいがあつたよ!」

「それじゃあ渡していくから席についてくれ」

そう言うと同時に一瞬で全員が席に着き早く早くと急かす

俺の料理をそこまで楽しみにしていると思うと自然と笑みがこぼれた

松崎さんに預かってもらつておいた風呂敷の包みははずし蓋をあけると中にはサン

ドイッチが詰まっていた

今か今かと待ちわびている子どもたちにサンドイッチを手渡していく

「それじゃあ手を合わせて、頂きます!」



「頂きます!!」

食事の挨拶を済ませてすぐに子どもたちはサンドイッチにかじりつく

「おいしいー!」

「うん!おいしい!」

ワイワイと笑顔でサンドイッチをほおぼっていく子どもたちを見て作った立場としてはこれ以上ない

お返しだった

「あ!これ花がはいってるよ!」

「知ってる!これ菜の花っていうんでしょ!」

「ああ、それは食べられる花なんだ。栄養も高いし春一番の食品でもあるから入れてみたんだ」

「へー、そうなんだ!」

「四郎お兄ちゃんって物知りだね!」

「いや、料理をするうえでたまたま知っただけさ」

「いいなあシロエちゃんは。いつもこんな料理食べられるなんて」

「うん!お兄ちゃんの料理は世界で一番おいしいんだから!」

「いや、褒めてくれるのは嬉しいけどそれは流石にいいすぐじゃないか?」

あまりの過大評価に苦笑する

「私も料理が出来たらいいのになあ」

「それぐらいならいくらでも教えてやるぞ。そうだ！じゃあ次は皆で調理実習でも開いて簡単な料理でも

やってみるか！」

「調理実習!？」

「私、調理実習なんてしたことない！」

「楽しそう！」

子どもたちは身経験である調理実習に期待を膨らませながらまた一口とサンドイッチを食べる

菜の花のサンドイッチは子どもたちにとっても評価が高かった。